ヴィクトリア朝ロンドンの墓地事情
-ケンザル・グリーン・セメタリーを中心に-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小宮, 彩加 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18708

明治大学教養論集　通巻524号
(2017・3) pp. 155-170

ヴィクトリア朝ロンドンの墓地事情

── ケンザル・グリーン・セメタリーを中心に ──

小　宮　彩　加

ロンドンの北西にある庭園墓地，ケンザル・グリーン・セメタリー(Kensal Green Cemetery)。ここに女神と二人の天使たちの像の彫られた真っ白い大理石の背の高い墓碑がある（写真 1)。正面に「彼女に（TO HER)」と大きく書かれたこの優美な墓は，ヴィクトリア朝時代の有名シェフのアレクシス・ソアイエ（Alexis Soyer, 1809-58）が，出産時に亡くなった若き妻エマ（Emma Soyer, 1813-42）のために建てたものである。生前，著名な画家であったエマを想い，墓の背面には彼女の絵筆とパレットを入れるところも作られていた。ソアイエ自身も，1858 年に亡くなったときには，同じ墓に埋葬されたという。

エマの墓は，ケンザル・グリーン・セメタリーにある墓の中でも一際美しく芸術的価値が高いことで知られている。私は，ロンドンに行ったとき，この墓を見るためにケンザル・グリーン・セメタリーを訪れた。瀟洒な白い壁に囲まれ，入口にはロート・アイアンの優美な，しかし，厳重な鉄格子の扉。中に入ると，庭園墓地というだけあって，緑が豊かで広々としていた。受付で売られていたケンザル・グリーン・セメタリーのパンフレットを読むと，ここにはヴィクトリア朝時代の著名人の多くが埋葬されていることがわかった。

ソアイエの墓から少し歩いたところには，ソアイエがリフォーム・クラブの料理長をしていた時分にリフォーム・クラブの会員で，ソアイエと親しかっ

写真1
エマ・ソアイエの墓（著者撮影）

た作家ウィリアム・M・サッカレー（William Makepeace Thackeray, 1811-1863）の墓があった。推理小説の父といわれる作家，ウィルキー・コリンズ（Wilkie Collins, 1824-1889）もケンザル・グリーン・セメタリーに埋葬されているし，チャールズ・ディケンズの伝記作家として有名なジョン・フォースター（John Forster, 1817-1876）の墓もあった。その他にも，オ

スカー・ワイルドの母親で詩人「スペランザ」ことレディ・ワイルド（Lady Jane Francesca Wilde, 1821-1896），1859年に世界で初めてナイアガラの滝を綱渡りで渡ることに成功した綱渡り師ブロンディン（Jean-Francois Gravelet Blondin, 1824-1897），一世を風靡したサーカス師のアンドリュー・デュクロウ（Andrew Ducrow, 1793-1842），人目に触れることを極端に嫌がり，屋敷から最寄駅まで馬車で通れる大きさのトンネルを掘らせた奇人として有名な第5代ポートランド公爵（William John Cavendish-Bentinck-Scott, 1800-1879）もケンザル・グリーン・セメタリーに眠っている。さらには，ヴィクトリア女王の叔父で初代サセックス公爵のオーガスタス・フレデリック（Augustus Frederick, 1773-1843），その妹のソフィア妃（1777-1848），第2代ケンブリッジ公ジョージ皇太子（1819-1904）など，王室の人もここを埋葬場所に選んでいたことを知った。

しかし，ケンザル・グリーン・セメタリーの歴史はそう古くはない。1832年の法改正によって建設が認められ，その翌年に，のちに「偉大なる7つの墓地（“the Magnificent Seven”）」[1] と称されるようになるロンドン近郊の7つの公園墓地のうち最初のものとして建てられたものだった。その中でも，ケンザル・グリーン・セメタリーには，王室関係者も埋葬されているため，「死者のベルグレイヴィア（“the Belgravia of Death”）」[2] とか，「墓地の中の貴族（“the aristocrat of cemeteries”）」と言われるようになり，他よりも格の高い公園墓地とみられるようになったのである。

G. K. チェスタトンの書いた “The Rolling English Road”（1913）という詩は，次のように締めくくられている。

> For there is good news yet to hear and fine things to be seen,
> Before we go to Paradise by way of Kensal Green.[3]

墓地の設立から約80年後，チェスタトンの時代には天国の入り口にある墓

地として名前が挙げられるほど広く知られるようになったケンザル・グリーン・セメタリー。本稿では，ケンザル・グリーン・セメタリー設立の背景となったヴィクトリア朝時代の墓地事情と墓地改革運動について概観したい。

＊　＊　＊

まず，ケンザル・グリーン・セメタリーについて述べよう。ロンドン郊外の庭園墓地とはいうが，ロンドンの中心からのアクセスは驚くほど良い。たとえばオックスフォード・サーカスからであれば，地下鉄ベイカールー・ラインで20分のケンザル・グリーン駅まで行き，そこから歩くこと5分程で墓地に到着することができる。総面積は72エーカーほどあり，その緑豊かで広大な敷地には，多種多様な動植物が生息しているそうだ。

中央の主要な部分は英国国教徒のための墓地であるが，非国教徒の埋葬エリアも別に用意されている（図1）。19世紀初頭，埋葬は英国国教会の教区教会が独占する権利だった。死者が出たら，教区の教会に幾らかの埋葬料を支払って埋葬してもらうのだが，これは非国教徒にとっては意に反すること

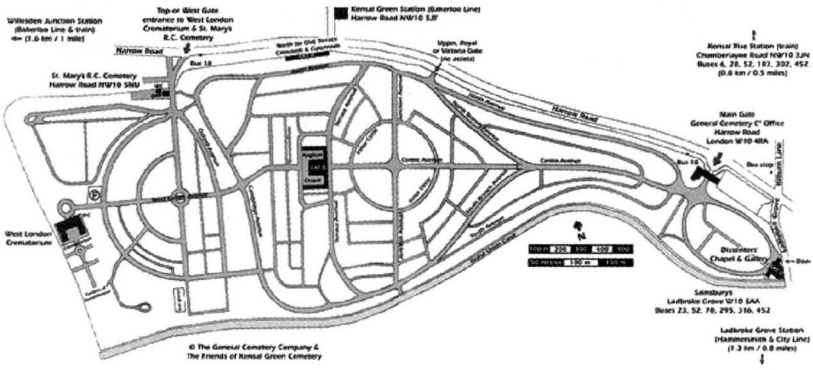

図1

ケンザル・グリーン・セメタリーの地図。中央に位置するのが英国国教会のチャペル。www.kensalgreen.co.uk/documents/KG_location.html より。

であった。そのため非国教徒は早くから自分たちの墓地を作るようになっていたそうだ。ケンザル・グリーン・セメタリーは宗教に拘らず，誰でもお金さえ払えれば埋葬することができたという点が当時としてはかなり斬新なところであり，そのために既得権を持つ英国国教会などからは強く反対されたのであった。

墓地の運営母体は，今でも設立当初から変わらず，ジェネラル・セメタリー社（General Cemetery Company）である。1832年に法人として認可が与えられたことにより，一株25ポンドで目標の45,000ポンドの出資金を集め，墓地建設に向けて本格的に始動したのだった。最初の埋葬は，1833年1月31日に行われたという。

ケンザル・グリーン・セメタリーをはじめとした公園墓地の建設につながる一連の墓地改革運動がロンドンで始まったのは1820年代のことである。具体的には，ジョージ・フレデリック・カーデン（George Frederick Carden, 1798-1874）という法廷弁護士で，のちに雑誌『ペニー・マガジン（*Penny Magazine*）』の編集者にもなった男が，1821年にパリを訪れた際にペール・ラシェーズ墓地を見学し，同様のものをロンドンに造るべきだと考えたことがきっかけである。フランスでは既に1790年以降は，パリ市内での埋葬が法律で禁止されており，1804年にパリの近郊にペール・ラシェーズ墓地が造られたのだった（Walker, 86）。緑豊かで美しい自然の中に立派な墓石が点在している様子は，カーデンが知っている，ロンドン市内の劣悪な教会墓地とは雲泥の差であった。愕然としたカーデンは，早速ペール・ラシェーズ墓地のような庭園墓地をロンドン郊外にも造るべく，有力者に働きかけるようになったのである。

ジョージ・カーデンが1825年に出版した「英国版ペール・ラシェーズ墓地の発起書」には，美しく平和な風景こそ死者の埋葬場所として相応しいとか，都心部の墓地が満杯になっており，腐敗した死体から出るガスや病原菌が近隣住民の健康を脅かしているなど，様々な理由をあげて公園墓地の必要

性が主張されているが，興味深いのは，公園墓地の最大の利点としてその安全性が推されていることだ。発起書の中でも，「安全性（SECURITY）」という言葉はすべて大文字で記載されており，とりわけ強調されていたことが分かるのである（Curl, 23）。

墓地の安全性がそれほど重要視されていたことには理由がある。この当時のイギリスでは，墓から遺体が盗まれてしまうことが珍しくなかったのである。18 世紀から 19 世紀前半まで，医学校や解剖学校で解剖することができたのは，処刑された犯罪人の死体だけだった。ウィリアム・ホガース（William Hogarth, 1697–1764）の描いた連作『残虐の 4 段階』の最後の作品では，子供のころから残虐な行為を繰り返し，挙句の果てに殺人を犯して処刑されたトム・ネロが解剖台に載せられている様子が描かれている（図 2）。大勢の見学者に囲まれて，トムの解剖が行われているのが分かるだろう。犯罪人は絞首刑と同時に死後の解剖が宣告されたという。遺体解剖は，いわば処刑後にも続く刑罰のようなものだったのだ。

ロンドンで最初の解剖学校は，1747 年にウィリアム・ハンター（William Hunter, 1718–83）が設立したものだが，その後，医学や解剖学を学ぶ者は増加し続け，学生数は 1790 年代には 200 人程度だったのが，1820 年代には 1000 人になっていたそうだ。アストリー・クーパー外科医が 1828 年に議会で行った証言によると，当時 700 人いた解剖学の学生に対し，正規に供給される検体は年間 450 体しかなかったそうだ（Arnold, 110）。その結果，需要に満たない部分を補うために，埋葬されたばかりの墓から「新鮮な」死体を掘り起し，それを解剖用に売る死体盗掘人（“body-snatcher”，あるいは “resurrection man”）が暗躍していたのである。たとえば，『トリストラム・シャンディ』（1759–67）の作者のローレンス・スターン（Lawrence Sterne, 1713–68）は，ロンドンで亡くなるとハノーヴァ・スクエアのセント・ジョージ教会墓地に埋葬されたのだが，その 2 日後にはケンブリッジ大学の解剖台に載せられていたという。まさに解剖されようというときに，解剖医がその

図 2
William Hogarth, *The Four Stages of Cruelty: The Reward of Cruelty* (1751)

遺体がかの有名なローレンス・スターンであると気づいたために，解剖が中止になり，スターンの遺体は再び埋葬されたという珍事もあったそうだ（Arnold, 109）。

19 世紀に入ると，解剖用の検体が高値で取引されていたために，死体をより手っ取り早く入手するための殺人事件まで行われるようになっていた。特に有名なのは，エディンバラで起こったバークとヘアの連続殺人事件であ

る。ウィリアム・バークとウィリアム・ヘアの2人は，1828年の10か月の間にヘアの家に下宿した16人を次々と殺害し，ロバート・ノックス医師に解剖用の検体として売っていたことが明るみに出て逮捕されたのだった[4]。同様の事件はロンドンでも起こった。1831年，解剖用検体として売られていた14歳の少年の死体に不審な点があったことから事件が発覚する。実はその少年は，牛をロンドンの市場で売るために田舎から出て来ていたところを誘拐され，殺害されていたのだった。

このような一連の殺人事件が契機となり，1832年には解剖に関する法律が成立する。これによって，処刑された犯罪人だけでなく，病院や救貧院で死亡し，48時間経っても引き取り手のない者や貧しくて葬式が出せない者の遺体も解剖に回されるようになったのだった。キリスト教の考え方では，復活（resurrection）のためには体がそのままの形で残っていることが重要であるため，死体解剖には強い抵抗感があるそうだ。犯罪人であれば，死後にも与えられる罰という意味で，死体解剖されるというのは納得がいく。しかし，貧しい者にも死後解剖という罰を与えるというのは，新救貧法同様，貧しい者に厳しい法律だったと言えるだろう。

後に大作家となるチャールズ・ディケンズは，20代のはじめ，議会で速記記者をしていたのだが，それはちょうどこの解剖に関する法案が議論されていたのと同じ頃だった。『二都物語』の登場人物の一人が死体盗掘人であるのも，ディケンズがこの議論に詳しかったからかもしれない。さらに，若きディケンズは自らを「死体盗掘人（Resurrectionist）」と称することがあった。1835年に，ある雑誌編集者を訪れ，名刺を置いていくように言われたとき，次のように書いたという（Sanders, ix）。

Charles Dickens, RESURRECTIONIST, *In search of a subject*

どんな題材でも掘り起こして活き活きとした物語を創り出す小説家という職業を死体盗掘人と同じようなものと自虐的に考えたのだろうか。いずれにせよ，安全性を誇るケンザル・グリーン・セメタリーには，死体盗掘人を寄せ付けないための高い塀と高い柵が設けられたのだった。

＊　＊　＊

もうひとつ，公園墓地の設立を促した社会事情がある。それは，ロンドン市内の墓地の過密問題である。ロンドンの人口は 1801 年の調査時で既に 100 万人を超えていたが，その後もどんどん増え，1831 年には人口は 187 万人，1851 年には 265 万人になっていた。ロンドンでは，この急激な人口増加への対応が間に合わず，都会の不衛生な住環境に暮らす労働者の平均寿命は非常に短かったという。1842 年の統計によると，労働者の平均寿命は 17 歳，職人であっても 30 歳だったそうだ（Arnold, 94)。死亡者数の多さは墓地不足に拍車をかける。この問題は，当時の雑誌でも取り上げられており，1834 年の『ペニー・マガジン』には次のように書かれている。

> In large towns, and more especially in the metropolis, it has become more difficult to find room for the dead than the living.

ロンドンでは，生きているうちに暮らす場所を見つけるのも大変だったであろうが，死んでから葬られる場所を見つけるのはもっと大変なことだったというのだ。

ただでさえ，埋葬が追い付かない状態であったのに，ロンドンは 19 世紀前半にはコレラやチフスの流行に度々見舞われてしまう。1832 年のコレラ流行時には 7,000 人がコレラに罹患し死亡したという。コレラによる死者の遺体も，都市部の狭い墓地に折り重なるように埋めるよりほかなかった。死体であふれる墓地から放たれるガスや臭気，さらには死体から出る毒素が水

源を汚染するために墓地の周辺地域ではコレラ流行がなかなか収まらず，患者を増やす原因となってしまったと考えられている。衛生上の理由からも，早急に郊外に墓地を造らなくてはならないという主張が繰り返されたのだ。のちにヘンリー・モーズリーはこの当時を振り返って，次のように書いている。

> [I]f it had not been for cholera, it is doubtful whether the cemeteries would have proved to be a profitable speculation.

モーズリーのいうように，公園墓地建設を願うカーデンたちにとって，コレラ流行が追い風になったことは確かである。1832年2月のコレラ流行から数カ月後の1832年7月11日に，ケンザル・グリーン・セメタリーの建設のためのジェネラル・セメタリー・カンパニーの法人化が議会で認められたのも偶然ではなかろう。

その後，都市部の過密した墓地が疫病流行の原因となっているということを，ロンドン市内の47か所の墓地の状況の調査をもとに具体的に指摘したのが，ロンドンで医師をしていたジョージ・アルフレッド・ウォーカー（George Alfred Walker, 1803–79）である。「墓歩きウォーカー（Grave Walker）」の異名をとるウォーカー医師の出版した『墓地から得た収穫（*Gatherings from the Graveyards*）』（1839）により，埋葬場所の過密問題はもはや放っておくことができない状態であることが明らかにされ，1842年には政府内に特別委員会が設置された。ウォーカー自身も，“Society for the Abolition of Burial in Towns” を設立し，ロンドン市内の埋葬の禁止を求める運動を始めた。ウォーカーの報告書に影響を受けたエドウィン・チャドウィック（Sir Edwin Chadwick, 1800–90）も調査に乗り出し，その結果は『労働者階級の衛生状態に関する報告（*The Health of Towns and the Condition of the Labouring Classes*）』（1842）と同時に出版された補遺

「都市の埋葬の実態に関する特別調査の結果について（On the Results of a Special Inquiry into the Practice of Interment in Towns)」に詳しくまとめられている。

チャドウィックも，ウォーカーと同じく，ロンドン市内の埋葬地の問題を衛生上の問題として捉えていた。人口密集地に容量をオーバーした教会墓地があることは都市の住民の衛生上大きな問題だと考えたのである。チャドウィックの報告書により，ロンドン中心部の墓地の総面積 218 エーカー弱の中に，20,000 人の大人の遺体と 30,000 人の子供の遺体が埋められていた実態が明らかになった。諷刺雑誌の『パンチ』は，いくらでも埋められるロンドンの墓地を，満員になってもさらに客を乗車させるロンドンのバスと同じだと揶揄している。

> A London churchyard is like a London omnibus. It can be made to carry any number.[5)]

このように無理矢理死体を埋葬しているロンドン墓地を小説の中で書いた作家がいた。それは，チャールズ・ディケンズだった。彼は当時の衛生問題に非常に関心が高く，1849 年に「ロンドン衛生協会（Metropolitan Sanitary Association)」が設立されたときには，進んでそのメンバーに加わっている。そして，『マーティン・チャズルウィット』(1843-44) の前書きにおいては，次のように書いているのである。

> In all my writings, I hope I have taken every available opportunity of showing the want of sanitary improvements in the neglected dwellings of the poor.

貧しい者たちが暮らす地区での衛生問題を様々なところで取り上げ，作品や

記事に書いてきたというディケンズだが，長編小説『荒涼館』(1852-53) ではロンドンのスラム街の生活を描写している。その第16章には，ロンドン市内の教会墓地の様子も描かれている。謎の代筆業者のネモが亡くなった後に埋められたロンドン中心部の墓地について，次のような記述がある。トム・オール・アローンズ通りと呼ばれるスラム街に暮らす浮浪児ジョーが，ネモの埋葬場所を尋ねてきたご婦人を墓地に案内する場面である。

> By many devious ways, reeking with offence of many kinds, they come to the little tunnel of a court, and to the gas-lamp (lighted now), and to the iron gate.
>
> "He was put there," says Jo, holding to the bars and looking in.
>
> "Where? Oh, what a scene of horror!"
>
> "There!" says Jo, pointing. "Over yinder. Among them piles of bones, and close to that there kitchin winder! They put him wery nigh the top. They was obliged to stamp upon it to git it in. I could unkiver it for you with my broom if the gate was open. That's why they locks it, I s'pose," giving it a shake. "It's always locked. Look at the rat!" cries Jo, excited. "Hi! Look! There he goes! Ho! Into the ground!"

ネモは，鉄のアーチのついた路地の奥にある墓地の中で，「台所の窓のすぐ近くの，あの骨の山の中」の「てっぺんに近いところに埋められ」，その際に死体が外に出ないようにするために足で踏みつけたというのだ。ネズミがちょろちょろしている悍ましい墓地である。『荒涼館』の挿絵画家フィズの描いたこの場面の挿絵（図3）には，墓石もまっすぐに建てられないほど地面が盛り上がった墓地が描かれている。墓地のすぐ脇のパブらしき場所の窓にビールをジョッキで飲んでいる男の影が描かれていることからも，この墓

図 3
Phiz, "Consecrated Ground" (1853)
Scanned by George P. Landow. www.victorianweb.org/victorian/art/illustration/phiz/bleakhouse/11.html

地が都心の密集地区にあることが窺える[6]。

チャドウィックの報告書と同じ 1842 年にウィリアム・マッキノン議員が中心となった特別委員会が出した報告書では，人口が 5 万人を超えるすべての都市の中での埋葬を禁じること，および教区ないし教区連合に対して郊外に新しい共同墓地を確保するための課税の権限を与えることを勧告した。マッキノン議員が繰り返しこの問題を指摘し続けたので，10 年後の 1852 年に，やっとロンドン市内での埋葬を禁止する法案が成立したのである。『荒涼館』のネモの埋葬場所のモデルとされた墓地も，1853 年に閉鎖され，1886 年に

はアスファルトで埋め立てられ，1896年には子供たちが遊ぶための公園として生まれ変わったそうである。このようなロンドン市内の教会墓地の過密問題も，墓地事情の改善のための運動の背景にはあったのである。

＊　＊　＊

ケンザル・グリーン・セメタリーを訪れ，見学したことから，ヴィクトリア朝時代の墓地事情について関心を抱き，調べてみることになったのだが，調査を進めるうちに墓地改革運動が，当時の主要な社会改革であった衛生改革と大きく関わりのあるものであったことが明らかになった。そして，この問題に強い関心を抱いていたチャールズ・ディケンズは，自身が編集長を務めた雑誌や小説の中で度々，衛生問題や墓地問題について意見を述べていたこともわかった。今後はディケンズを中心にして，ヴィクトリア朝時代の衛生改革についてさらに調べていく所存である。

《注》

1）そのほかの墓地は以下の通り。
　ウェスト・ノーウッド墓地，1836年設立。ハイゲイト墓地，1839年設立。アブニー・パーク墓地，1840年設立。ナンヘッド墓地，1840年設立。ブロンプトン墓地，1840年設立。タワー・ハムレット墓地，1841年設立。
2）ベルグレイヴィアは西ロンドンの超高級住宅街である。Philpot, 83.
3）G・K・チェスタトン自身は，ケンザル・グリーン・セメタリーではなく，バッキンガムシャーのビーコンズフィールドにあるカトリック教会の墓地に埋葬されている。
4）この事件をもとに，R・L・スティーブンソンは短編 “The Body Snatcher”（1884）を書いている。
5）*Punch,* July-December, 1849.
6）ディケンズが書いた手紙によると，ネモの埋葬場所は，コベント・ガーデンのドルーリー・レイン劇場そばのセント・マーチン・イン・ザ・フィールズの墓地のようであるが，『荒涼館』の実際の描写と合致するのは，そこから少し離れたラッセル・コートのセント・マリー・ル・ストランドの墓地である。Andrews, “Where Was Nemo Buried?” に詳しい。

参考文献

"An Act to Amend the Laws concerning the Burial of the Dead in the Metropolis" [1 July 1852]. www.legislation.gov.uk/ukpga/1852/85/pdfs/ukpga_18520085_en.pdf

Andrews, Malcolm. "Where was Nemo Buried?" *The Dickensian.* no. 497. vol. 111. part 3. (2015): pp. 245–56.

Arnold, Catherine. *Necropolis: London and Its Dead.* Pocket Books, 2007.

Brooks, Chris. *Mortal Remains: The History and Present State of the Victorian and Edwardian Cemetery.* Wheaton, 1989.

Brundage, Anthony. *England's "Prussian Minister": Edwin Chadwick and the Politics of Government Growth, 1832–1854.* Pennsylvania State UP, 1988.

Chadwick, Edwin. *Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain: A Supplementary Report on the Results of a Special Inquiry into Practice of Interment in Towns.* Clowes, 1843.

Curl, James Stevens. Ed. *Kensal Green Cemetery: The Origins & Development of the General Cemetery of All Souls, Kensal Green, London, 1824–2001.* Phillimore, 2001.

Dickens, Charles. *The Uncommercial Traveller.* Ed. Daniel Tyler. Oxford UP, 2015.

Flanders, Judith. *The Victorian City: Everyday Life in Dickens' London.* Atlantic Books, 2013.

Jackson, Lee. *Dirty Old London: The Victorian Fight against Filth.* Yale UP, 2016.

Litten, Julian. *The English Way of Death: The Common Funeral since 1450.* Robert Hale, 1991.

Meller, Hugh, and Brian Parsons. *London Cemetries: An Illustrated Guide and Gazetteer.* History P, 2011.

Morsley, Henry. "An Enemy's Charge." *Household Words.* 20 October 1855. p. 267.

Philpot, Terry. *31 London Cemeteries to Visit Before You Die.* Step Beach, 2013.

Richardson, Ruth. *Death, Dissection and the Destitute.* U of Chicago P, 2000.

---. "Robert Louis Stevenson's *The Body Snatcher.*" *The Lancet.* 385.6699. (2015): pp. 412–13.

Sanders, Andrew. *Charles Dickens: Resurrectionist.* Macmillan, 1982.

Sheppard, F. H. W, Ed. "Kensal Green". *Survey of London. vol. 37. Northern Kensington.* (1973), pp. 333–339. *British History Online.* www.british-his

tory.ac.uk/report.aspx?compid=49882.

"The Founding of Kensal Green Cemetery." www.kensalgreen.co.uk/documents/KG_history.html

The Friends of Kensal Green Cemetery. *Paths of Glory, or A Select Alphabetical and Biographical List, Illustrated with Line Drawings of their Monuments, of Persons of Note Commemorated at The Cemetery of All Souls at Kensal Green.* The Friends of Kensal Green Cemetery, 1997.

The Penny Magazine of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge. 150 (2 Aug 1834): p. 298.

Walker, George Alfred. *Gatherings from Grave Yards: Particularly Those of London, with a Concise History of the Modes of Interment Among Different Nations, from the Earliest Periods, And a Detail of Dangerous and Fatal Results Produced by the Unwise and Revolting Custom of Inhuming the Dead in the Midst of the Living.* Longman, 1839.

Wood, Claire. *Dickens and the Business of Death.* Cambridge UP, 2015.

（こみや・あやか　商学部教授）